特集・国際化時代の市民と行政❹

横浜の国際性への提言

コトバと国際交流

中村　哲夫

一――はじめに
二――国際的に開かれた市民・都市・国家
三――英語即国際語？
　コトバはプラスの帰還係数を持つ
四――横浜の国際性
五――おわりに

一――はじめに

二人連れの旅人あり。一人が腹をすかし「腹へった。飯が喰いたい」という。「では、茶店で……」と歩いて行くが「一膳めしありやなきや」と書いてある旗を見て、「有りや無きや……こいつあ何だ、わからねえ、おまんま喰えねえ」というと、「一膳飯あり　柳屋」と読むのだと他方が諭す。

別な話

ある男、文を貫って開いてみるに「やしろうとんかめいとへまいりそろ」と書いてある。「弥次郎どんが冥土へ参り候」と読んで、大騒ぎになる話。実は、「弥次郎どん亀戸へ参り候」

また「ふたへにまげてくびにかける数珠」を注文するはなし等、どういう読み方をするかという観点に話しの行き違いの原因がある噺は、枚挙に暇がない。

コトバの機能(特に表記)が、不充分であるといってしまえば、それまでであるが、これらの話は、コトバの二つの重要な側面、ないし機能を示唆している。一つは、コトバは意思伝達の手段・道具であること。他の一つは、読み方によっては全く異なる意味内容を取り出し得る側面を持つことである。この後者にあっては、それを拡大し、実際の諸言語間の相違を考えても、同様なることが言える。同一現象を、異なる言語を話す者が、能うるかぎり詳細に、精密に記述することで、同一情報を伝達し得るかというと、必ずしもそうではない。……何故か？

コトバは、外界をそのコトバ固有の方法によって切り取る。外界自体は、同一であるが、見る人は、その人なりに、(コトバに影響された方法で)その特定のものにのみ、注目する。花の好きな人は、どこへ行っても、すぐ花が目につくが、そうでない人は、意に介さぬのと同様に、コトバに依存して着眼点が異なる。例えば、日本語では、単数、複数の区別を余り明確にしないが、英語ではいちいち単・複の区別をしないと発話できない。切り取り方次第で、西瓜も四角になるではないか。

以上のように、①人間相互の意志疎通を為す手段　②ものがアプリオリルに在って、それを諸言語が別な

命名―レッテルを貼る訳ではなく、各コトバ自身が種々様々なるものを他から切り離し、それを一つのものとしてまとめるという、コトバの機能が観察される。

国際間の交流には、必然的に異なるコトバを介在し、コトバの機能上の相違から、先の落語の例に類する行き違いを含めいろいろな問題を含み得る。

日本語が全世界で一様に母語（Muttersprache）として用いられているならば、国内と同様なコトバの機能を期待出来得るであろう。しかし、現実には千を超える言語が用いられ、それらは個々の文化と密接に関連し、伝統を形作り、人の考え方と深く関わっているので一筋縄ではいかない。それでは、世界で通用すべきコトバを設定し、それに依る国際交流を考えたら如何であろうか。

コミュニケーションのみに対象を限定すれば悪くはない。しかし、前述②との関連で、人間の考えの多様性、個の尊重という分は、悪影響を受けるばかりであり、下手をすると人類の築いてきた文化遺産、伝統等の抹殺につながりかねない。であるから、特定の一言語を国際語の名の許に国民的規模で捉えることは、地球的な（特定の地域のみの交流ではない）国際交流を目指す限り、大きなマイナスと言わねばならぬ。

二――国際的に開かれた市民・都市・国家

新聞、ラジオ、テレビ等でよく、「国際○○」とか、「国際△△」とかいう表現を見聞する。例えば、国際交流、国際大会、国際都市、国際結婚、国際電話…。

しかし、「国際～」と銘打たれればうたれる程、「国際」と銘打つ必要性が高かったからではないか、と思われてならない。わざわざ国際的という冠飾句を用い、他と区別し、これは国際的であるぞ、という精神から、この様な命名が出て来るのではないだろうか？　今や、電気冷蔵庫とは、あまりいわない。電気式が当たり前だからである。音楽番組でクラシックと銘打たれるものの内容は、多かれ少なかれヨーロッパの音楽である。これらの番組を国際的音楽番組と命名するか？　西洋音楽というか？　寧ろ、邦楽番組には「邦楽」と冠せられる確率の方が高いであろう。つまり、この分野では、国際化していることが、自明なのである。〔もっとも、コトバのうえでは多かれ少なかれヨーロッパの音楽が無標で、譬えば、アフリカ（こういうまとめかたすら偏見があるかもしれぬが）の音楽には、民族音楽というタイトルが付きやすいが〕　先程の例に関して言うと、私の数年間のヨーロッパ生活では、「国際」と銘打たれていなかった感じをもっている。電話をかけるのに、国内か、国外か等の区別は、余り意識に昇らない。ドイツ人が、フランス人と結婚しても、国際結婚などという話題のされかたはなかった。TEE（ヨーロッパ横断鉄道）は、国際列車には違いないが、名称が示す通り、あまり「国際○○」は意識されない。国境超えとて、走っている列車中で、簡単な検札的処理で済むし、寝台列車でシュトットガルトからパリに行った時は、旅券を車掌に預けておいたら、翌日パリに着いて起こされ、返してもらった。（少なくとも西側ヨーロッパでは）国境は、日本流に例えると県境的であったし、スイス人だオーストリー人だドイツ人だというような、直接的、国籍を特に取り上げて云々する雰囲気はあまりなかった。

日本以外にも同国人（または宗教的同門）ということだけで、他の人々より、親近感、義務感を持つ人々もいる。スイス人は、スイスにとても誇りをもっているし、オーストリー人にしても然りである。しかし、日本人の如き精神構造「うち」か「そと」か……つまりよそ者かという構えは、出発点では余り多くは無いと思われる。外国人が常に身の廻りに多いし、更に、外国人を制度上区別するような、社会的システムが多分、日本に比べて少ないのではないかと考えている。日本で公立の小

学校へ上がったりする場合、外国人であるが故に区別されることは、例えば、西ドイツに比較しずっと多い。勿論、社会の成り立ち、国家間の取り決め、地理的、歴史的条件の異なる国々の、それも極く一部のみを、他から切り離し比較するのは、必ずしも当を得ないが、それでも、何が独自で、何が優れ、何が劣り、他の人々は如何に生き、如何に生活を享受しているか等を知ることは、常に良いことであると思う。

「どの国のどんな子供にも、十六歳に至るまで、とにかく〔住民登録〕をした人の子供には、〔子供のお金〕(Kindergeld) と称するお金が出る。べつにこの国に生まれなくともよろしい。トルコ人がトルコで生まれた子供を連れて来ても同じことだ。……」(「図書」一九八六年三月号 小田 実氏「子供代々」の国での歴史と政治の「体現」の誕生という見出しでの一文から)

この国とは、西ベルリンのことである。西ベルリンというと、日本ではともすれば西ドイツの首都とか、少なくとも西ドイツに所属する領土という風に思っている人も少なくないが、実は、今もって第次二世界大戦の連合国側の英、米、仏の三か国の占領統治下にある。但し、実質は西ドイツ連邦議会にもオブザーバーを送っているし、西ドイツ政府が、種々様々な援助協力をしており、法制上も、共通の扱いが多く、人的、物質的交流も多いため、実際の生活をしてみると西ドイツと余り変わらないという感をいだくのも、また事実である。それはさておき、ことKindergeld に関してだけでも、何という国際性の高さであろうか。つまり、実質的には、何等区別をしないのである。こういう例は、実は珍しいものではなく、たとへば、「お産の時の病院の費用負担、様々な給付」等でも、国籍による区別がつけられていない。また、ドイツのみの特異現象ではなく、たとえば英国も同様な扱いが多いと聞き及ぶ。彼等は、国際的取扱とか、人道上無差別的給付とか、大言壮語的キャンペーンをしないだけで、実際には何と国際的であることか。

国際的というのは、この例が示すが如く、人間が何処へ(何処の国へ)行こうと、国籍や、所属社会による区別、差別なく、あたかも、現地の人々と同じ様に、生活でき、行動出来る可能性が存在することが最上である。つまり、その国籍等の違いを認識する必要の無い生活が出来ることである。A国籍者には国を挙げて諸種の便宜を供与し、B国籍者には何も知らせず、我関せずの態度で接し、C国籍者には、それどころか、偏見、予断をもって扱うというのは、「国際的に開かれた市民・都市・国家」ではない。実際の日本ではどうか?

三――英語即国際語?コトバはプラスの帰還係数を持つ

前章では、国際化は、コトバ上「国際〇〇」と扱えば良いのではなく、寧ろ、こういう断り書が不必要になる方向が望ましいということを述べた。この章では、更に、実利的な観点から、外国語学習について述べ、併せて、英語、即、国際語の見方は誤りで、国際化に逆行し、危険なる側面をも持つことを示そう。

一般個別言語、例えば日本語は日本で用いられているコトバである。ところが、ドイツ語にそれを当てはめて、ドイツ語とは、ドイツで(いまやドイツ連邦共和国〈西ドイツ〉、ドイツ民主主義共和国〈東ドイツ〉になってしまったが)話されているコトバであると、簡単には言えない、朝鮮語(韓国政府は、韓国語と表記)も同様である。ついでながら語学番組「ハングル講座」は、不適当である。理由は、ハングルとは諺文(おんもん)、つまり字母の体系の呼称であるから。使用されているコトバには、国名と、直接の関係がない。

フランス語、英(米)語にして然り。国家と、その属する(構成する)民族とは歴史的にみて同一ではない(なかった)し、ある民族が別の国に組み入れられ、そこで、別な公用語を強制されてもそう簡単には同化しな

い（ないしは出来ない）ほうが多かった様である。

世界に目を転ずると、非公用語ながら、少数のコトバ（例、スイスのレトロマン語）が、なお根強く代々語り続けられるのは、実に健気であると思う。しかし、丁度トキが絶滅寸前であるが如く、少数言語が風前の灯になってしまっている例が幾つかある。コトバの滅亡は、そのコトバに内在する精神の、また、過去累々と積み上げた文化的遺産の消失を意味し、人類全体の規模で考えると残念なことである。

それとは逆に、勢力を伸ばしているコトバもある。日本語に関しては最近僅かではあるが、海外でも日本語講座が拡充されたり、日本に関する紹介記事が増大しつつあると聞き及ぶ。これは、好ましい傾向（貿易不均衡に伴う攻撃的、または、偏見を伴った記事であれ、なお無視されるよりは良いと私は考える）を示している。一般に、コトバの使用層の拡大は、プラスの帰還係数を持っている。つまり、コトバが新たに学習されると、その国に対する関心もひきおこされ、今までは存在すら知られていなかった諸々のもの、例えばその国語圏特有の文化遺産、芸術、伝統等も新たに紹介される可能性が増大する。一旦、それらが紹介されると、刺激されて、新たに興味を抱く人が増えるだろう。この循環が繰り返されると、次第にその言語を学ぶ人々、関心を持つ者が増加し、ついには、辞書、文法書等の出版にも連がろう。文献等が整備されると益々学習し易くなるので、学習人口も増加しよう。このコトバが普遍化してくると、色々な催しものも増えマスコミ等で取り上げられるチャンスも増える。実際に、そのコトバが使用されている国へ渡航する者も、増えてくるだろう。まわりまわってこのコトバが、ラジオ、テレビの語学講座にも取り上げられ、日本にいれば、全国津々浦々にて、このコトバが学習出来る状態も招来するのである。コトバは、数学の学習等とは異なり、必ずその基盤である文化、社会等を含めた学習にならざるを得ない。コトバが判って来ると、心理的垣根が取り払われ、更にそのコトバに関する文化的事情が良く理解出来る場合が多くなる。そういう意味で、コトバの使用層が拡大することは、プラスの帰還係数を持っているということがいえる。「翻訳されたものを読めば判る」とか、「どのコトバが、国際会議の討論用言語として選ばれても大した変化はない」等というのは、全く見当外れと言わなければならない。第一、立場の異なる外国人を相手に、侃侃諤諤と、こちらの主張を認めさせ得る議論を日本語でやれるか、あるいはまた、別な外国語でやらなくてはいけないかということには、天と地の差がある。国連の公用言語に世界第二次大戦の敗戦国のコトバ―日本語もドイツ語も採用されていない。これは世界の諸交流を考えるとき、世界に対してアピールしなければならない日本にとって、我々日本人にとって、相当に大きなハンディキャップである。

そういう理由から、国際語というものを想定し、それが実際に広く使われている、ないしは、それを解する人が多いという根拠のみで、特定の一言語にのみ、その役割を担わせるというのは、それを母語とする人には都合が良いことではあっても、それ以外の人々を不当に扱いコトバの暴力をその人々に対し振るいかねない危険が存在する。

日本の如く、言語も、人種（？）も、宗教も、生活レベルも、考えることも、やることも、大同小異、均一的というのは少数派に属しよう。諸外国から見た場合、余りにも統一的関心・反応・考えかたというのは全体国家のそれにも似て、良いイメージを持たれない。国際化を標榜する場合、これではならぬ。国際人というのは、決して、英語を流暢に話し、外国人と巧く仕事ができる人ではない。日本人は、何故、こういうものの考え方を為し、何故、こう生きるかを、日本人の立場からアピールすることが、国際理解に寄与する。例えば、英語が得意であるからとて、英語の発想から日本を見ることは日

本人に求められるべきものではない。英語を母語とする人々の方が、それをもっと完璧にやってのける。しばしば、その方が説明に楽だからとて、安易な同調をする（外国語に堪能なる）日本人を見かけるが、これでは国際交流とか、相互理解等、巧く機能出来ない。相手と自分の考え、ものの見方が、如何に離れているのかの認識こそが出発点でなければならない。コトバに因る要素がしばしば意見対立の原因であるからとて、そのコトバの要素を少なく持つ人、つまり、日本人であることを次第に喪失すれば、より国際性が増すなどということは妄想である。日本人は、あくまでも、日本人の個を持ち、日本流の考えを他に紹介し、理解させ、更には相手の考え方も理解できる思考上の柔軟性、包容力を持たなければならぬ。異なる考え方、ものの見方のできる人が三人寄って初めて「文殊の知恵」になるのであって、個を持たぬ人が、三人寄っても「付和雷同」に異ならない。

個を持つべきであるというのは、国際交流を考える際、コトバにも言える原則で、猫も杓子も英語というのでは、特定の国々にとって便利でも、他の人々に、不利益を強いることが多い。したがって、今の日本で「英語は、国際的に万能である」従って、国際語として、英語を学べば、それが、最善だという思想は、不充分である。次の章で、横浜市の立場を、この英語万能論から見てみよう。

四――横浜の国際性

前の章では、ある特定のコトバがコミュニケーションに役立つからという理由のみで、優遇（？）され、その自己増殖作用が故に、広範囲に他を圧して用いられる事態は、ものごとを特定の一面からのみ捕らえ、それで以て、全体と錯覚する危険性が増大するということを指摘した。

さて我が横浜市の対応は、この観点から、如何であろうか。

横浜市の発行する幾多の出版物では、「横浜は国際色豊かな都市で……」、「横浜は昔から国際性に富んだマチ…」、「新たな国際交流の場づくりを」、「このような〝国際都市・横浜〟を形成するため、本市では現在、国際活動を中心に、様々な国際化のための施策が繰り広げられています。」等、「国際性、国際的」であることを印象づける文言が多い。英語偏重病の蔓延する日本の社会で、横浜市は、コトバからの観点から国際性があるのであろうか。

「開かれた国際都市『横浜』へ32の提言」（昭57年度）に拠ると、横浜在住の外国人は、市の人口の一％に満たないが、それでもなお、その少数なる人々に、少数なるが故に、種々の施策を国際化の方向ですべきとしている。同提言には、いくつかの問題点を除き、なるほどとおもわせられる指摘が多かった。もっとも、まだ不備であったのかと、その遅さを嘆かざるを得ない局面もあったが。

さて、同指摘の問題点のうち、コトバに関する部分のみを抜き出してみよう。

・外国人に分かる案内標示―略―主要な標示には少なくとも英語を併記することが……

・119番救急電話の英語による…

・外国人観光客の誘致―日本を訪れる外国人に対して積極的な誘客PRを行う。市内観光案内や催物情報を盛りこんだ英文ガイド・マップを作成、配布する。―略―

また、同提言に対する取り組みなどの項で、市総務局災害対策室では英語を話す外国人子弟のために、地震時の心得と手引を冊子にし―略―

これを読むと、関係者一同「国際語＝英語」病に憑かれていると思わざるをえない。さらに、「国際性をはぐくむ学校教育の推進」の項では―略―コミュニケーション手段としての語学教育を強化し―略―世界の知識を正しく、片寄りなく教え……とあるが、コトバとの関連で些か気になることがある。例えば極東とか、中近東とか、ヨーロッパから見た表現（つまり、日本語で極東、中近東というのは、地理的条件が異なるので、翻訳そのままの受け売りはおか

しい）に表されているが如く、世界の知識を偏りなくと言いつつも、他のコトバの、そして、日本では、英語の影響を否応なしに受けている状況で、どういう基準で何が偏っていないといえるのか。地理の教科書（中学校等での）に、アメリカ大陸はコロンブスによって発見されたとあるそうである。これは、一〇〇％英語国民の見方であって、アメリカのもとからの住民達に言わせれば、「何という侵入、略奪か」というであろう。

我々は、あまりにも、特定の外国語に飼い馴らされて、正当では無い見方に、ないしは、他の見方を最初から抹殺することに慣れすぎてはいないだろうか。この傾向は、残念ながら他の横浜市の出版物においても、多かれ少なかれ見られる。もう一つ例を示そう。「昭和六十年度横浜帰国子女教育ガイド」という小冊子がある。九ページ「日本語回復教室での授業と内容」という見出しで、日本語が不充分な児童に、早急に日本語を回復する実際の授業内容に関しての説明がある。その一部を抜き出すと「今まで英語を使ってきた子どもに対しては、英語で日記を書かせたり、時には英語の会話をとり入れるなどの方法によって滞在国で身につけた語学力の保持をはかり、使用する言語が急に変わることによるカルチャーショックをやわらげるように配慮しています」（以上原文のまま）とある。

非英語圏から帰国した児童に対して、同様な記載は、まったく見当たらない。実際は義務教育で、九九％英語を学習し、英語にたいして親近感を持ち、英語を解する人が一番多いと思われるその環境では、今まで英語を使ってきた子どもこそが、他の言語環境で育って来た子供達に比較し最も庇護の必然性が少ない筈なのに……。

同引用文の、英語を、たとへば、中国語、アラビア語等に入れ換えて読んでみよと言いたい。

在日外国人の理解する言語は、多分英語が一番多い、ないしは、英語圏からの帰国子女が一番多いという推測に基づく、いわば、便宜主義的考え方によっているのであろう。だが、その対象にならない人々は、一体、どういう救いを期待すればよいのか。商社等の勤務で、英語圏以外の国々へ赴任する父親が、日本の英語偏重社会、帰国子女の受入でも英語圏からのそれのみを優遇するということを考える時、なお、就学年齢の子供を伴って、赴任するものだろうか？

コトバは、プラスの帰還係数を持つ。非英語使用者にのみ、それ程大きい重荷を負わせてもいいものであろうか。行政の立場からすれば、寧ろ少数派へのきめ細かい配慮が、より求められるのではないのか。

昭和五十九年九月庁内報に、「好評 My City」という見出しで、英語版暮らしのガイドに寄せられた市内在佐外国人からの反響です……と始まる報告がある。英語版暮らしのガイドというからには、朝鮮語版、フランス語版と続くことを期待するが、逆に、英語版＝国際版のつもりであれば、「ブルータスよおまえもか」である。

TVニュースが、多重放送で、英語でも聴ける。TVの映画は、（統計をとらず、感じで推測するのであるが）少なくとも六〇％程は、英語圏制作のものであろう。これも英語で聴き得るのである。ところがフランス語、ドイツ語等でのフィルムは少数である上に、楽しみにしていても、多重放送の対象にすらならぬことが少なくない。

日本では、そして、我が愛する横浜市でも、英語を解せぬ外国人は「来るな」「住むな」というのであろうか。私にはとても象徴的に思えた一文を次に引用する。

「鈴木エリザベータ　ポーランド磯子区―略―買物の話を一つします。近所では顔をよく知っているから親切ですが、相鉄ジョイナスのブテックに行くと、外人だというので英語を話せる人を呼んできます。けれど私は英語を話せない外人です」（調査季報第六五号　七―横浜在住外国人の市民生活「横浜に住む外国人に聞く」加藤勝彦氏から）

つまり、日本語表記であっても英

表―1　横浜市の外国人登録人口

総務局行政部区連絡調整課（単位：人）

年度(月)末	総数	韓国朝鮮	中国	アメリカ合衆国	イギリス	フィリピン	カンボジア	オランダ	西ドイツ	インド	タイ	その他
57年度末	21,679	13,061	4,753	1,206	417	252	82	111	150	132	87	1,428
58年度末	22,427	13,244	4,912	1,359	450	309	147	127	139	120	93	1,527
59年度末	23,264	13,334	5,181	1,453	496	388	207	158	137	129	101	1,680
60年11月末	**23,724**	**13,355**	**5,304**	**1,478**	**550**	**407**	**215**	**174**	**139**	**129**	**103**	**1,870**

注1）外国人登録法に基づく登録人口である。　　統計横浜　No.397（1986年1月号）
　2）国籍については、直近年度末における登録人口の多い順に掲載してある。　　総務局事務管理部統計課

語表記であっても差がない人々は、一体何とするか?。「日本で生活する外国人は、英語を学べ」と、行政サイドが認識しているのか。実際、外国人が、横浜で、日本で生活する時、そのグループが少数であればある程、諸種困難な状況も多いと思われる。英語を理解しない人は、想定の通り、少数かもしれない。問題はこの少数の人達には、他の大部分（であるかも知れない）の人々が知り得る種々情報が伝達されにくいし、その人々の主張が、例えば、行政レベルにまで聞こえて来にくいことにある。

「英語＝国際語、従って、英語に依る表記、案内、手続き、刊行がなされる」ことを以て、あまねく（国際的に）周知（??）させたという誤解乃至、偏見があるのではないか。例えば人口比率を根拠にするならば、寧ろ、朝鮮語が、横浜市にとって、第一外国語ではないのか?（表―1）

人口比率が基準であるべしという主張をするのならば、上記少数派は同じく困るであろうが、ある合理的根拠に基ずく選択といえよう。

人間性を発揮するためには、「個の尊重」ということが挙げられて良い。つまり、一〇〇人集めたら、一〇〇人とも同じ思想・知識信条の持ち主で、モノの見方、考え方まで同じであるまたは、近似というのは、実に恐ろしいことなのである。然るに、「英語を習得することは、国際人の第一歩」の如き、どこかの外国語教習所のスローガンの如き考え方を色々な層において、少数ではない方々が、思い込んでいることが、もっと恐ろしい。

平凡社の百科事典の広告の中の一文であったろうと記憶するが、あれ程客観的かつ公正なる記載を心掛けている百科事典類でも、コトバの影響、各国の社会的情勢・状況が反映されてしまうのである。鈴木孝夫氏の指摘の如く、Bulldogの記載は、大英辞典（一五版）には殆どない。数年前のフォークランド（マルビナス）諸島の紛争では、表記の選択がどちらの主張を採用するかの態度決定に通じていた。たかが〝名称・呼称〟ということ勿れ。

崔牧師（チョエ・チャンホア　崔昌華）の「自分の名前を、韓国で呼ばれている呼びかたで、放送してくれ」と、インタビュー時に、NHK記者に要請しておいたのに、無視され、日本語読みで放送されたことを契機とし、裁判という手段で自分の主張をなしたことは記憶に新しい。

一・二審とも、結局、原告の訴えは却下された。被告NHKの弁明が日本語の慣習には馴染まないという根拠であったにも拘らず、その後、韓国大統領全氏が訪日するに際して、当のNHKが瞬時にそれまでの「ゼン　トカン」読みから「チョンドファン」へと、読み替えてしまった事には唖然とさせられた。もし、チョエ・チャンホア（崔　昌華）氏の控訴審判決（昭和五十八年七月二十一日民一部判決、福岡高裁）が、韓国大統領全氏の訪日直後であったなら、如何なる内容であったろうか。国家権力は、コトバまでも瞬時に変更させ得る程強いものであると認識

すべきか。もしくは、日本人のコトバに対する感じ方、関わり方というのが、特異なのであろうか……。

五――おわりに

コトバと国際交流というテーマの枠内で考えてきたが、コトバとはただ単に、コミュニケーションの手段のみとは看なし得ず、既に、思考、発想の段階から、深く関わり合っている。ある事象、物体（等を、どう外界から切り取るか）の、どの部分に関心をあて、どういう命名をするかというのは、コトバと深く関わっており、ただの名前ということではすまない。だからこそ、必死で自分に都合の良い名称、呼称、区切りかたを主張するのである。

日本には、外来語が氾濫しているという。日本語には存在しなかった新しい概念の輸入ではなく、古くから相応の術語があるものにも、外来語を用いる場合がある。政府答弁を聴くが良い。マイナスシーリングだ、国民のコンセンサスだ……枚挙に事欠かぬ。だがしかし、それは日本の態勢の裡に、その培養土的土壌が存在していたからで、これの方が、寧ろ、問題とすべきことである。

つまり、日本人の九九％が既に義務教育で学習する外国語が指定されている状況は、健全なことではない。コトバのプラスの帰還作用と相俟って、英語の全能性という神話が、副作用的につくりだされる。このことが表面上の国際化推進とは裏腹に、広い目でみると、寧ろ、排他的土壌を創りだし、非国際化の一因になる虞がある。

筆者は、英語を排斥したり、その効用を制限すべきであるとは思わない。ただ一つのコトバのみを国際語の誤解の許に賛美し、他のコトバを話す人々を、昔、ギリシャでバルバロイ〔聞き苦しいコトバを喋る者の意、現代でも、barbarish等（または似た綴り）で、野蛮な、という意味をもつ言語は、少なくない〕と称した如く、差別、排斥するようにはならぬことを切に願う。

国際的交流は、人、文化、思想、物資等、有形無形のものの交流でもある。コトバは、常にそのうちのどの形態にも関与している。こちらは日本語で話し、先方は、その外国語で話して、なお相互に理解できるような状況になれば、なんと良いことか。また、特定の言語一辺倒ではなく、実利とは必ずしも結び付かない言語であっても、もっと多種多様に学ばれる環境が出来ればなんと素晴らしいことか。

内外を問わず、外国人にもっと日本語学習の機会を提供すべきである。日本を、東洋の神秘的な国としてのみアピールする時代はもう終わった。日本人が特別視されたり、外国人を特別視する時代でもない。自分の体験に日本人との関わりが無く、日本語も判らない外国人は、作られたイメージを信ずるより他に手段はないかもしれない。だが、日本語が学べる機会が増えれば、「富士山・歌舞伎・芸者」的イメージは、直ぐに、現実の新しい情報に取ってかわられる。

過去、何年もの間、外国で主に義務教育で用いられている教科書等の日本関係の記述をアップトゥデートなものにするように、外務省を中心として各国に改善の申し入れが行われた。一国の、あるいは一民族の、既に形成されたイメージはそう簡単には変えられないらしい。

こうした面からも、我々が直接に外国を訪問し、世界の色々な人々と知り合いになることが望まれる。そうすれば、多元的なものの見方や知識が増大し、延いては日本や日本人の様々な面をアピールすることにもつながると思う。

横浜市には、多くの姉妹・友好都市があるのだから、このチャンネルを通しても、もっとアピールし理解を深めることは意義深いことであると思う。

交流の多元化こそ、「国際交流」の要であり、それ故、特定の一外国語のみの押しつけ的選択は好ましいことではない。

だからと言って、即、さまざまな外国語学習を声高に主張するもので

はなく、英語経由の情報とそれ以外のチャンネルからの情報とのアンバランスにも留意して欲しいということである。

世界中の情報は、なるほど英語経由ででも入ってこよう。しかし、その中にはもはや一次的情報ではなく、英語またはその使用者のフィルターを通した情報となったものも多くあると思う。

昔から、港を中心とする先進都市であった横浜市は、外国人（だから区別するという）意識が少なく、国際文化都市を目指す街だから、他に先駆けて、さらに一歩進めた、こうしたことをも期待できるし、またそれは歴史的必然でもあろう。

世界には、英語以外の文化文明も豊富で、横浜市から、そして海外の諸都市から情報が往き来し、偏らずに多元的に、かつ直接的に諸種交流が進むことを国際化時代の市民と行政に期待している。

〈大分医科大学助教授〉